

「がん検診」の受診に関する メリット・デメリットについて

「がん検診」、「人間ドック」の受診に際しては、「がん検診」の目的、種類、がん検診のメリットとデメリットを確認して、受診してください。

1. がん検診の目的

国民の2人に1人が“がん”になり、4人に1人が“がん”で亡くなっています。
がん検診の目的は、無症状のうちにがんを早期に発見し、適切な治療を行うことによって、がんによる死亡リスクを減少させることです。

2. がん検診の種類

厚生労働省では、がん検診の指針を定め、**科学的根拠に基づくがん検診を推進**しています。

(表1 国が推奨するがん検診の一覧)

種類	検査項目	対象年齢	受診間隔
胃がん検診	問診および胃部X線検査 または胃内視鏡検査のいずれか	50歳以上 ※当分の間、胃部X線検査 については、40歳以上に 対し1年1回実施可	2年に1回 ※当分の間、胃部X線検査 については年1回実施可
子宮頸がん検診	問診、視診、子宮頸部の細胞診 および内診	20歳代	2年に1回
	問診、視診、子宮頸部の細胞診 および内診	30歳以上	2年に1回
	問診、視診およびHPV検査単独法		5年に1回
肺がん検診	問診、胸部X線検査 および喀痰細胞診	40歳以上 ※喀痰細胞診については、 原則として50歳以上の 喫煙指数（1日本数×年数） が600以上の者のみ	年に1回
乳がん検診	問診および乳房X線検査 (マンモグラフィ) ※視診・触診の単独実施は推奨しない	40歳以上	2年に1回
大腸がん検診	問診および便潜血検査	40歳以上	年に1回

- ・表1にある対象年齢より若い年代ではがんにかかる方が少なく、がん検診の有効性も確認されていないため、対象年齢に達してからがん検診を受診することを推奨します。
- ・「胃がん検診」（胃部X線検査または胃内視鏡検査）は**50歳以上が対象年齢となっています。人間ドックの基本検査項目に組み込まれていますが、受診者本人の希望により、キャンセルすることも可能です。**
※ただし、キャンセルによる自己負担の減額はありません。
- ・一度がん検診で「陰性」と判断されても、数年後にがんが発生する可能性があるため、受診間隔に沿って、定期的に受診することが大切です。適切な間隔で受診してください。
なお、現在がんや前がん病変で治療中の方は、がん検診の再開時期については、治療終了後に主治医とご相談ください。

市区町村が実施する「がん検診」の活用もおすすめします

お住まいの市区町村では、健康増進法に基づいて、がん検診を実施しています。
がん検診の費用の多くを公費で負担しており、一部の自己負担でがん検診を受けることができます。ご活用ください。

3. がん検診の利益（メリット）・不利益（デメリット）

がん検診にはメリットだけでなく、デメリットがあることを理解して受診しましょう

がん検診の利益（メリット）

- ・ **早期発見・早期治療により命を守る**

がんという病気は進行すればするほど死亡率が上がります。早期発見することで、早期治療につながり、がんによる死亡率を下げることができます。

- ・ **がんの治療が容易**

早期であれば治る可能性は高く、治療も軽くすむことから、身体的・経済的負担が軽減されます。がんに限らず疾病が発見されることにより、適切な治療ができます。一方、症状が出てから病院の外来等を受診して発見されるがんは、比較的進行した段階のことが多く、臓器によっては治療が難しい場合があります。

- ・ **「異常なし」が確かめられた安心**

がんという病気に漠然と不安を覚えながら生活するのではなく、定期的に検診を受け続けることで、がん検診では異常がなかったという安心感を得ることができます。

がん検診の不利益（デメリット）

- ・ **偽陰性** **がん検診でがんを100%発見できるものではありません。**

異常なしと判定されても、検査で発見が難しい小さながんなどが存在する可能性があります。

- ・ **偽陽性** **結果的に不必要な治療や検査を受けてしまう可能性があります。**

「がんの疑い」と判定されれば、必ず精密検査を受ける必要があります。しかし、精密検査を受けた結果「がんではなかった」ということも多くありますが、ある程度は避けようがありません。

- ・ **過剰診断** **生命の予後に影響しない、微小で進行の遅いがんを見つけてしまうこと**

いったん見つかった早期がんは、治療するために手術などの治療が行われます。この治療は、本来は不要であった可能性があり得ることがあります。

- ・ **検査・精密検査の偶発性** **検査に伴う偶発症が起こり得ること**

検査によって身体に負担がかかる場合があります。

例 胃内視鏡検査による出血や穿孔、胃X線検査における誤嚥・腸閉塞
胃X線検査・マンモグラフィ・胸部X線検査による放射線被ばく等

- ・ **心理的影響** **がん検診を受けることによる心理的負担**

個人差はありますが、検査の結果が悪性か良性か、検査結果が出るまでの心理的負担は大きいものです。

4. がん検査の流れ

がん検診は、がんの疑いがあるか異常がないかを判定する検査です。

がんの疑いがあると判定された場合は、医療機関での精密検査を指示されます。

精密検査を含めて「一連のがん検診」として、がんの有無が確認されるため「**要精密検査**」の判定があった場合は、**放置せず、必ず医療機関を受診してください。**

「症状がない」「健康だから」といった理由で精密検査を受けないと、もしがんがあった場合、診断が遅れ、がんが進行してしまう恐れがあります。

がんの疑いなしだった場合やがん治療が終了した場合でも、定期的にかん検診を受けましょう。

参考 腫瘍マーカー検査について

「腫瘍マーカー」＝「がんの早期発見の検査」と思っている方も多いようですが、「腫瘍マーカー」は、がんの診療（治療判定・がんの進行度評価）においては重要な検査ながら、がんの有無を判定する検査ではないため、健診時に受ける検査としては適切ではないとの見解も出されております。